

病害虫の発生概況

〔病害の発生概況〕

1. 稲・麦

1995年は、梅雨明け後晴天の日が続いたため、稲病害の発生は全般に平年並みかやや少発生傾向を示した。いもち病では、6月に九州地方各地で感染好適条件が出現し、発生拡大傾向が見られた。そのため、宮崎、鹿児島、熊本、大分各県で注意報が出されたが、梅雨明け後の気象が高温少雨で経過したためその後の進展が押さえられ、結局、葉いもちは平年並み～やや多、穂いもちは平年並み～やや少発生となった。近年、ヒノヒカリなどの罹病性品種の作付が増加しているが、これに伴っていもち病が増加する傾向にあることが、熊本などで指摘されている。

紋枯病の発生時期は平年並みかやや遅く、少雨となったこともあって、全般に平年並み～やや少発生となった。佐賀では7月上旬の大雨により圃場が浸冠水した結果、一部地域で白葉枯病が多発した。

縞葉枯病や萎縮病などは、媒介昆虫の少発生が続いており、また保毒虫率も低率に推移しているため、全般に発生が少なくなっている。しかし福岡では萎縮病の発生地域が拡大しており、発生もやや多かった。

もみ枯細菌病は、佐賀で多発生、福岡、大分、宮崎でもやや多発生と、全般に発生が多かった。佐賀では8月下旬～9月上旬に高温多湿となり、この時期出穂期を迎えていた普通期中生品種に発生が多くなった。福岡、大分、宮崎でも同様で、高温多湿となった時期に出穂期を迎えていた品種で発生が多かった。

麦類の病害は全般的に平年並みかやや少発生であったが、赤かび病が佐賀、長崎、熊本、大分でやや多発生であった(長崎、佐賀、福岡各県で注意報発表)。福岡では大麦縞萎縮病、小麦縞萎縮病が多発生した。特に、あまぎ二条や農林61号で発生が多かった。福岡および佐賀では斑葉病が多発した。種子消毒の不徹底が原因と考えられている。

2. 野菜・畑作物

イチゴでは、近年うどんこ病が多発傾向にあるが、本年も大分、宮崎、鹿児島でやや多～多発生となった。鹿児島、長崎、宮崎、福岡、大分各県では注意報が出された。罹病性品種の作付、早取り技術の普及、薬剤防除の不徹底などが多発要因として挙げられる。長崎では *Colletotrichum cingulata* による炭そ病が多発生し、また萎黄病の発生も多く、それぞれ注意報が出された。また *C. acutatum* による炭そ病も、発生地域が拡大した。キュウリでは、全般にうどんこ病の発生が多く、冬春

キュウリで佐賀、熊本、宮崎でやや多、夏秋キュウリでは福岡、佐賀、熊本、宮崎でやや多、大分で多発生となった。宮崎の冬春キュウリでは、モザイク病もやや多発生であった。

冬春ピーマンでは、うどんこ病が宮崎でやや多、鹿児島で多発生となった。大分の夏秋ナスでも、うどんこ病がやや多発生であった。冬春トマトでは、灰色かび病が佐賀でやや多、熊本で多発生となり、疫病が大分でやや多発生であった。

その他の野菜病害では、福岡でトマト茎えそ細菌病が、鹿児島でオクラ黒根病およびダイコン炭そ病が新発生した。

ダイズ病害は、宮崎で紫斑病がやや多発生であったほかは、いずれも平年並みかやや少ない発生であった。黒根腐病が、宮崎で新発生した。

ジャガイモ病害の発生は全般に少なかったが、長崎では近年ジャガイモYウイルスによるモザイク病の発生が増加している。

3. 果樹

1995年の果樹病害の発生は、全般に平年並みかやや少発生であった。しかし鹿児島ではブドウのべと病が9月以降激発し、福岡でも多発生、長崎、大分でもやや多発生であった。カンキツでは、佐賀、鹿児島などでかいよう病が中晩柑類で多くみられた。佐賀および熊本では、ナシの疫病が多発生した。両県とも過去に発生事例がなく、5月の強風や降雨が関与しているとも考えられるが、はっきりした原因は不明である。このほか福岡ではブドウ根頭がんしゅ病、佐賀ではブドウ白腐病が新発生した。

4. 茶樹・花き・特用作物

チャでは、鹿児島で輪斑病が多発生した。また鹿児島で、炭そ病がやや多発生であった。宿根カスミソウでは、福岡、佐賀、熊本、大分および宮崎でうどんこ病(仮称)が発生した。本病はわが国でも新発生の病害である。病原菌は *Erysiphe* sp. と考えられるが、現在同定作業が進められている。佐賀では20圃場中13圃場で、大分県九重町ではほとんどの圃場で発生がみられ、出荷を中止した事例も出た。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

〔害虫発生概況〕

1. 稲・麦

水稲：九州北部，南部とも7月上旬後半には梅雨明けし，梅雨前線が停滞する期間が短かった。そのため，海外飛来性のイネウカ類の飛来は一部を除き平年並み～少なめであった。セジロウカ，トビイロウカの飛来は6月4半旬～7月5半旬にみられ，主要な飛来は6月6半旬～7月1半旬であった。その後の発生も全般的に並み～やや少なめであったが，秋にはトビイロウカによる坪枯がみられた地域もあった。九州各県ではここ2～3年でウカ類をターゲットにした長期残効型殺虫剤の箱苗処理が急速に普及した。

一方，同じ海外飛来性のコブノメイガは多発した。主要な飛来が例年よりやや早く6月6半旬から7月1半旬にみられ，この時期としては飛来量が非常に多かった。そのため鹿児島県や長崎県では7月の第1世代から，その他の地域では8月の第2世代に被害葉が激発した。7月中旬から8月上旬に宮崎，鹿児島，熊本，福岡，佐賀各県で注意報，7月下旬に鹿児島県で警報が発表された。9月の第3世代幼虫の発生は少なかった。全般的にヒメトビウカは並み～やや少，ツマグロヨコバイの発生は少なかった。

イネミズゾウムシはおおむね平年並みの発生で発生面積は横ばい状態にある。スクミリンゴガイは暖冬の影響で冬期の生存率が高く，発生量はおおむね多から並みであった。九州・沖縄の発生総面積は前年より約3000ha拡大し，45,195haとなった。佐賀，大分両県での分布の拡大が顕著であった。また，九州各県で試験的に開始された直播栽培で大きな被害が出て問題となっている。

福岡と鹿児島両県でイネクロカメムシがそれぞれ多発およびやや多発した。本種は農業に極めて弱く，有機農業の普及以来発生は極めて少なかった。本種の発生増加は近年の減農薬の機運の影響かもしれない。

稲作後期の害虫である斑点米カメムシは福岡，佐賀，長崎各県で発生が多かった。これらの地域では暖冬の影響で越冬密度が高く，早期水稲や早植水稲が多発した。9月上旬に長崎県で注意報が発表された。

麦：アブラムシ類，ハモグリバエ類等，麦類の害虫発生は平年並み以下で特記事項なし。

2. 畑作物

ダイズ：ハスモンヨトウは7月下旬から8月の高温乾燥条件下で多発が懸念されたが，発生量は各県とも並み～やや多にとどまった。福岡県ではフェロモントラップの誘殺状況から8月中旬に注意報が発表された。莢を加害するカメムシ類もおおむね並み～やや多の発生であったが，宮崎県では飼料作物や早期水稲から移動増殖したカメムシ類がダイズで多発生した。アオクサカメムシ，ミナミアオカメムシ，イチモンジカメムシが主要種

であった。その他，ダイズサヤタマバエ，シンクイ類，ウコンノメイガ等はおおむね並みからやや少なめの発生であった。

サツマイモ：鱗翅目害虫のナカジロシタバ，ハスモンヨトウ，イモキバガは大部分の県で平年並みの発生であったが，宮崎，鹿児島両県ではやや多の発生であった。沖縄ではイモゾウムシ，アリモドキゾウムシの発生がやや多かった。

ジャガイモ：長崎県で食葉性ヤガ類の発生がやや多であった。アブラムシ類，ニジュウヤホシテントウなどその他の害虫はおおむね平年並み～やや少ない発生であった。

3. 野菜

共通：1994年に福岡，佐賀，宮崎県で初確認されたミカンキイロアザミウマは1995年には熊本，鹿児島，長崎，大分県においてピーマン，イチゴ，キク，バラ，ガーベラなどで確認され，沖縄県を除く九州全土に分布を拡大した。本種は寄主植物の種類が多く，有効薬剤が少ないこと等から被害の拡大が懸念される。

ナス科野菜：マメハモグリバエはトマト，ナスで発生が多い傾向にあり，沖縄県ではキク，サヤインゲン，宮崎ではシュンギクなどでも多発生した。また，鹿児島，大分，佐賀県でオオタバコガがピーマン，トマトで多発生した。ミナミキイロアザミウマ，アブラムシ類，ハダニ類は，宮崎県のピーマンでミナミキイロアザミウマが多い傾向にあったほかは平年並みの発生であった。

ウリ科野菜：タバコナジラミがメロン，カボチャ，(鹿児島県)，マメハモグリバエがスイカ，トウガン(沖縄県)，ミナミキイロアザミウマがスイカ(大分県)などで多い地域が一部にみられたが，アブラムシ類，ハダニ類も含めて害虫の発生は全般に平年並みか少発生傾向にあった。

アブラナ科野菜：コナガが夏作，秋冬作のハクサイ，キャベツ，ダイコン等で多い傾向にあった。また，鹿児島県でハイマダラメイガがダイコンで多発生した。ヨトウムシ類が秋期にキャベツで多い傾向が認められた。

イチゴ：ハスモンヨトウは発生時期が早い傾向にあり，育苗期，定植初期から被害が増大する傾向が各地でみられた。アブラムシ類とハダニ類は一部の地域で発生が多い傾向がみられたが，全般には平年並みか少発生であった。

その他の野菜：佐賀，長崎，鹿児島県でタマネギ，ネギ類のネギアザミウマの発生が多い傾向がみられた。また，本種は佐賀県ではアスパラガスでも発生がみられた。

4. 果樹

共通：カメムシ類の越冬量は少なかったが，おもな増殖源であるスギ，ヒノキの穂果の着果数が多かったため，夏以降急増した。このため佐賀，長崎，熊本，宮崎，鹿児島各県では注意報を発表した。しかし，餌(穂果)が十分あったので，多発したわりには果樹園への飛来は少

なかった。

カンキツ：ミカンハダニの春の発生は少なかったが、夏以降は効果的な殺ダニ剤が少ないため多発した地域があり、長崎、宮崎両県では注意報が発表された。ナシマルカイガラムシは福岡、熊本、宮崎各県で管理不良園の増加のため発生がやや多かった。アカマルカイガラムシ、ゴマダラカミキリも管理不良園を中心に増加傾向にある。大分、沖縄両県でミカンハモグリガ、佐賀県でミカンサビダニの発生がやや多かった。ヤノネカイガラムシ、チャノキイロアザミウマ、ミカンサビダニ、ロウムシ類の発生は並み〜少であった。熊本県でミカンキイロアザミウマ (ハウス栽培)、沖縄県でミカンアシブトクチバ (新芽加害) の発生が新たに確認された。

ナシ：ナシヒメシンクイが福岡、佐賀両県で多発し、長崎、大分両県でやや多発した。この原因として、ここ数年カメムシの発生が少なく、同時防除されなかったことと無袋栽培の増加、適期防除の不徹底等が指摘されて

いる。ハダニ類の発生が、梅雨期以降の高温少雨等により九州全県でやや多かった。またミカンハダニでは、カンキツ園から移動してくる個体群が発生の主体となる地域で薬剤抵抗性が問題になっている。ナシホソガ、アブラムシ類が佐賀県で、モモシンクイガが大分県でやや多発した。

モモ：熊本県でアブラムシ類とナシヒメシンクイ、大分県でモモシンクイガとモモハモグリガ、鹿児島県でモモハモグリガがやや多かった。

ブドウ：フタテンヒメヨコバイが大分県で、チャノキイロアザミウマが福岡、熊本、大分各県でやや多かった。

カキ：コナカイガラムシ類が福岡、佐賀両県で多かった。ハマキムシ類とカキヘタムシガが福岡県でやや多かった。

クリ：主要害虫の発生はいずれも並み〜やや少なかった。熱帯果樹：鹿児島県と論島のバナナでバナナセセリガ、沖縄県のマンゴー (ハウス栽培) でドウガネブイ

1995年稲主要病害虫の発生面積

(単位：ha)

病害虫名	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	
(病害)									
葉いもち	21,564	8,370	8,000	17,000	21,200	17,951	14,230	180	
穂いもち	23,735	5,800	2,000	12,000	8,425	18,231	11,471	54	
紋枯病	37,527	28,500	9,000	18,000	26,500	14,108	23,150	214	
白葉枯病	693	8,300	50	400	535	0	10	1	
もみ枯細菌病	33,907	17,300	2,000	500	11,600	8,155	1,471	—	
雑葉枯病	152	100	250	100	600	0	170	0	
萎縮病	3,223	200	100	800	635	0	602	—	
黄萎病	—	0	10	0	—	0	363	—	
ごま葉枯病	693	7,650	2,900	100	4,750	278	1,095	282	
ばか苗病	693	480	1,600	200	2,350	0	830	3	
小粒菌核病	—	0	760	90	850	0	—	—	
心枯線虫病	53	5	30	20	9,400	0	881	17	
内穎褐変病	—	—	—	—	—	—	19,845	—	
(虫害)									
セジロウンカ	37,584	35,800	15,000	12,000	17,025	28,426	16,987	165	
トビイロウンカ	16,409	25,600	11,000	9,200	7,905	12,464	9,327	128	
ヒメトビウンカ	28,070	5,300	3,000	3,000	1,500	24,103	2,387	4	
ツマグロヨコバイ	23,314	10,500	6,000	7,000	9,675	20,389	4,451	508	
コブノメイガ	45,610	36,940	18,000	48,000	33,729	22,075	27,993	330	
イネツトムシ	17,056	3,000	1,000	30	13,150	835	5,659	4	
イネヨトウ	2,079	410	1,000	80	860	0	1,160	—	
フタオビコヤガ	1,538	0	100	40	2,350	0	1,767	4	
アワヨトウ	693	770	10	90	250	0	216	—	
ニカメイチュウ第1世代	0	0	0	0	430	0	0	0	
ニカメイチュウ第2世代	1,288	800	0	0	1,410	0	1	0	
イネミズゾウムシ	7,755	5,320	7,000	5,500	17,200	18,711	7,878	599	
イネゾウムシ	2,952	1,350	3,000	100	6,520	575	6,942	29	
斑点米カメムシ類	14,029	8,500	9,000	2,700	4,850	6,526	9,068	146	
イネクロカメムシ	1,842	15	200	50	950	288	324	89	
スクミリンゴカイ	18,128	9,974	1,644	4,300	3,425	4,127	3,502	95	
総作付面積	261,213	53,300	37,700	19,000	52,900	33,772	29,000	34,500	1,041

注) 宮崎・鹿児島は早期・普通期の、沖縄は一・二期作の合計を示す。

ブイ、マンゴーカタカイガラムシの発生が新たに確認された。

5. 茶樹

近年クワシロカイガラムシの発生が増えている。本年は佐賀、長崎県で多発、福岡、熊本、宮崎、鹿児島各県でもやや発生が多く、2番茶以降で実害がみられた。チャノキイロアザミウマはおおむね並み～やや多の発生であった。その他の害虫では大分県でウスミドリメクラガメが多発、ハマキ類が佐賀県でやや発生が多かった。

6. 特用作物

サトウキビ：奄美諸島ではクシコメツキ類とメイチュウ類の発生がやや多かった。沖縄県ではおおむね各害虫とも発生は並み～少であったが、宮古群島の一部地域でドウガネブイブイが多発し注意報が発表された。

1993年にサトウキビで新発生したシロスジオサゾウムシは沖縄・八重山群島で少発生、宮古群島では発生が認められていない。

いぐさ：福岡、熊本両県ともイグサシンムシガの越冬量が少なく、平年より発生が少なかった。

(九州農業試験場地域基盤研究部)

(野菜・茶業試験場久留米支場)

(果樹試験場口之津支場)